風景デザインレター from 九州(第21号)

今回は、先に作文して、関連しそうな本を探すということでの紹介となりました。本の中は、都市のアイデンティティの話や、歴史的街の在り方についての重要な示唆等が含まれていますが、これらはいつかまた記載したいと思います

作文後、梅棹忠夫の「京都の精神」を紹介したいと思って

【風景デザインの作法について】

最近の、風景デザインや景観デザインの話題の中に、「読み解く」というキーワードとともに、よく見かけるのが「デザインの作法」という言葉です。

作法とは、言葉や動作の決まり、エチケットという風な解説がありますが、要するに人の動きの型のルールだと思います。

最近、いい加減になっていると思われるのが、この形のルールで、自由な行動や個性を活かした発言等に重きを置きすぎたせいで、この「形」というものが非常にないがしろにされている。私自身は、日頃の行動からは想像つかないかもしれませんが、礼儀作法を始め、この「形」というものを大切にしたいと思っている一人です。いろいろなことを始める際に、「形」から入ることの妥当性や意義、役割を理解しているつもりと言い換えていいかも知れません。

代表的な作法に、茶道の作法があります。このような伝統的な作法は、そこにもつ洗練された姿が「形」というスタイルについて、長い長い年月をかけて試行錯誤されてできたもっとも合理的な姿であると思います。また、その「形」をマスターするということは、石の上に3年というように、技術的な取得に加え、焦りの気持ちや、邪な気持ちを拭い去るために必要な期間と行為であり、まさしく、雑巾掛けの期間です。よいものを早く作りたいという気持ちは大切ですが、きちんとものをつくるためには、技術的な習練に加え、心の修練が必要ですし、心の修練が伴わなければ、しんどいときに放り投げるように、単なる趣味に終わってしまう領域での話となってしまいます。

さて、デザイン、風景デザインの作法としては、最低限の作法を身につけるにはどうしたらいいか、あるいは最低限の作法とは何かについて整理してみます。

まずは、作法の行きつくところに「風景デザイン道」なるものが存在しているか。「道」とは、禅宗でいうところの悟り（見極めること）への道と考えますが、このような到達点が風景デザインにも、いや仕事のすべてにあると思っています。

まず、剣道や柔道のように、技を磨くことはその最初の手段であり、デザイン道（？）にも同様に、技を磨くことが求められます。

そのためには、自分と風景というものをしっかり見据えることであり、スケッチや写真でその状況を抜き取る習慣をもち、常日頃、風景と向かい合い、また、風景と対話し、それを解釈する能力を養うことです。どこに行くにも「カメラやスケッチブックを持っていくこと」は必須で、気になった風景は、きちんと写真やスケッチとして収めることが求められていると思います。しかし、カメラを持っていると何かいい被写体がないのか被写体を探す目が生まれてきますが、これはまだまだ初心者クラス。剣術でいえば、剣を腰にぶら下げて、街を歩いて誰か切ってみたくてしょうがないという物騒な状況と同じかも。かといって、この状態をしっかり実践しなければ最初の段階は卒業することができません。卒業するとどういうことになるのか。被写体は探すものでなく、向こうから飛び込んで来るものだということが分かります。いわゆる、風景とコンセントレートできた状態になるということです。あるいは、自分と風景とが一つのものになったと禅宗の坊さんは教えてくれるかもしれません。この状態が、「目利き」から、「目明き」への一段階アップしたことになったと茶道の本で読んだことがあります。いい茶碗かどうかが分かるのが目利きで、数千の茶碗から一瞬にしていい茶碗をよりわけることができるようになることが、この目明きの状態だということです。

思い出話ですが、この風景デザインに対して目明きの状態になっているのではと思った先生が、伊藤清忠先生で、以前、福岡のデコレーションが効きすぎた街を歩いているときに、突然、「この風景のなかにいると気分が悪くなった」と、本当に体調を崩されました。目明きになると結構この日本では

つらいだろうなとも思われます。

さあ、カメラを抱えて、岡村さんのように、どこに行くにも愛機のカメラを抱え、パチパチ撮りましょう。もちろん、ただやみくもに風景を見ているだけではだめで、心に惹かれる風景や街のデザインについて自分風に解釈してみる努力も必要でしょう。まあ、それにしても、いろいろ見て、写真に撮るのはとても大切な行為であると思われます。

被写体との関係でいえば、ここまでは風景カメラマンを目指すことと似た状況ですが、カメラマンは、これに高度な写真技術というものとセットになって写真を撮っています。私たち風景デザイナーは、この高度な写真技術に相当するところまでは必要ではなく、実践的な考察、つまり風景の治療法を描くということを考えながら写真を撮るということでカメラマンとは異なるでしょう。カメラマンではなく、風景の状態を理解するため、医者と同様に、患者（地域）に関する知識と経験が必要になります。ということで、カメラマンは、その風景を自分なりに解釈して作品化すれば完成ですが、私たちは、そこから相手との対話が始まるのです。

意外かもしれませんが、「道」というものには、必ず、相手があります。芸術、アートには、相手というものは基本的に必要でないのに対し、「道」には、相手という存在が必要です。つまりは、自分と相手の存在を分けてものを見る見方から解放されることが一つの道であるようなものではないでしょうか。柔道であれば、柔チャンのように小柄であっても相手の力を受けて投げ返すように、自分の力と相手の力が一つの力となって作用するところにその解決方法があるということで、風景、そこに生活している人々の力を使って、というか、その人々の力によって解決するための方策を提示すること、その能力を持つことが究極の目的ではないでしょうか。そのためには、最初に話した雑巾がけをしっかりしておき、人間性を磨いておくことで、いろいろの人から、権威者としてではなく、技術者として、あるいはひとりの人間としての信頼を得れるようになっておくこと、あるいは、親身になって物事を解決するという腹の据え方を体得していること等も大切であり、専門バカであったり、専門ぶりっ子であったり、サラリーマンであったりしないように自分をセーブすることができる人間性を身につけることが大切かと思います。また、いろいろな教養や知識を身につけておくこと等も大切でしょう。

さあ、思いなおして、再度スタートしてみようかと思い立つ。その際は、はやり、「形」から始めるということが、最も手っ取り早いのではと思われます。やる気を待っていてもやる気はどこからも出てきません。人間の生態的には、何事も、やる気が出るのは、やり始めてからといわれるように、やる気はやらなければ生まれてこないのだそうです。逆を言えば、やりはじめれば、やる気が出てきて、何事も面白くなるというのも事実。

前回のチキンとやるというレターに続き、少々、説教じみた話となりましたが、今回は、このあたりで、・・・・・・。

ちなみに、このレターを書いているのも、自分としては、修行の一環としてやっているようなところもあります。いまでは、少し自分をコントロールできるようになりましたが、昔は（若いころ）は、なかなか理屈っぽくかつ飽きっぽく、やり始めは元気がいいのですが、すぐに、こんな意味ないことを続けていてはいけないのではないかなど、勝手に理屈をねつ造しせっかくの行為を放棄することもたびたびありました。

しかし、ある時、腹を据えるということを体得してからは、結構、そのような自作自演の邪念は取り払うことができるようになりました。

そういえば、10 数年前、はじめて室長という役目を仰せつかった時に、室員を相手にデイリーニュースとして、毎日、新聞のようなものを書いて配っていた時期がありました。1 年以上続いたかと思います。また、思い出話になりました。今回はこの辺で、・・・・。

【続く】